

「鹿児島県の近現代」教育研究センター

近現代センター通信

第6号 2025年9月

—目次—

令和7年春のシンポジウム（伴野文亮）	1	像台座の銃弾痕（小林善仁）	5
中学生への体験講義・キャンパスツアーの実施（松田忠大）	2	五代家の墓碑銘について（友野春久）	8
令和6年度地域マネジメント教育研究プロジェクト報告会（日高優介）	3	鹿児島県伝統の音文化 薩摩琵琶の継承 最前線（原田敬子）	12
令和7年度地域マネジメントマネプロジェクト一覧	4	再録・中島馨「雪のサンタマリアの奇蹟」（鈴木優作）	13
鹿児島大学の戦争の爪痕－「玉利喜造先生」銅		寄贈資料・今後の予定	17

令和7年春のシンポジウム「〈#昭和100年〉で考える「鹿児島県の近現代」—食文化・鉄道・遊びにみる“つながり”の歴史と未来—」を開催しました

「鹿児島県の近現代」教育研究センター 特任准教授 伴野 文亮

2025年3月22日（土）に鹿児島大学学習交流プラザ学習交流ホールにおいて、令和7年春のシンポジウム「〈#昭和100年〉で考える「鹿児島県の近現代」—食文化・鉄道・遊びにみる“つながり”の歴史と未来—」を開催しました。当日は、YouTube ライブによる同時配信も行い、対面・オンラインあわせて120名ほどの方々にご参加いただきました。

今回のテーマは、「食文化」「鉄道」「遊び」という3点に着目して〈昭和100年〉の間における人びとの“つながり”の諸相と変遷を確認し、様々な場面で「分断」が進行する現代を生きるための知見の共有を試みるというものでした。「食文化」のパートでは、正岡佑月氏（法文学部4年生）による研究発表と、千葉しのぶ氏（NPO法人霧島食育研究会理事長、千葉しのぶ鹿児島食文化スタジオ代表）による講演がなされました。「鉄道」のパートでは、山本尚昌氏（法文学部2年生）と鹿児島大学乗り物研究

会、および鹿児島県立大島高校生徒による研究発表と、榎木郁朗氏（宮崎市史編さん事業近現代史部会長、宮崎歴史資料ネットワーク副代表）による講演がなされました。「遊び」のパートでは、鹿児島県立錦江湾高校生徒による探究成果の発表がなされたほか、伴野が講演を行いました。また、同一会場において、鹿児島県内にある高校の生徒による「総合的な学習（探究）」の成果のポスター発表も実施しました。

今回のシンポジウムには、10代から70代以上までの幅広い年代の方にご参加いただきました。閉会後のアンケートでは、「様々な分野において、鹿児島や周辺地域の近現代の状況を知ることができた」といった意見や、「大学生や高校生の発表もあるなど、次世代の人への探究も企画されていた」といった高校生・大学生による発表の機会を設けたことに対する評価など、多くの方から高評価を得ることが出来ました。

中学生への体験講義・キャンパスツアーの実施

「鹿児島の近現代」教育研究センター 副センター長 松田 忠大

「鹿児島の近現代」教育研究センターでは、地域の歴史・文化・自然や、鹿児島大学が有する様々な文化・学術に関する資源を学校における教育活動に活用してもえるような取組を進めている。この取組の一つとして、鹿児島を訪れる修学旅行生に、本学の教員による専門性の高い体験授業・実習と、本学郡元キャンパスにおけるキャンパスツアーを実施している。

昨年度に引き続き、5月12日（月）に、東京の山脇学園中学校の修学旅行を受け入れた。今年度は、昨年度の2倍近くの83名の生徒が本学を訪れた。同校の生徒は、前日の研修先であった種子島から本学に到着した後、10時50分より、一つ目の体験講義として、農学部の寺岡行雄教授による「世界自然遺産屋久島の歴史と課題」というテーマでの講義を受講した。講義終了後には、近現代センターの教職員の前で、山脇学園の生徒による課題研究成果の発表が行われた。その後、生徒たちは学習交流プラザの1階で昼食をとり、13時より、二つ目の体験講義として、本学の佐藤正典名誉教授による「干潟のいきものたち」というテーマでの講義を受講した。体験講義でテーマとして取り上げられた鹿児島の自然や生き物に対する生徒たちの関心は高く、熱心に講義に耳を傾けている姿が印象的であった。

体験講義終了後には、郡元キャンパスにおけるキャンパスツアーを実施した。今年度は、イギリス・ロンドン市公認ガイドである前園氏の指導のもとで、本学学生が主体的に生徒のガイド役を務めた。ガイド役の学生は、ガイドの心得を学んだうえで、ガイドルート上のいくつかのスポットで、生徒に対する説明を行った。

本学は、単に教育研究の場であるだけで

なく、特色ある研究を行っている研究者、学習や観光に役立つ、歴史、文化、自然に関する多くの地域資源を有する場でもある。教室や昼食場所の確保など、平常の教育活動が行われている大学のキャンパスで多くの修学旅行生を受け入れることによるいくつかの課題もあったが、こうした課題を解決しつつ、本学の資源を、広く教育や地域の活性化に活用できるよう、今後も、中高生の修学旅行の受け入れを継続していきたい。



令和6年度地域マネジメント教育研究プロジェクト報告会 「鹿兒島の近現代」教育研究センター 特任助教 日高 優介

令和7年5月24日、郡元キャンパス法文学部ラーニングコモンズにて「令和6年度地域マネジメント教育研究プロジェクト報告会」を開催いたしました。本報告会では、昨年度に助成された13件のプロジェクトに関する成果報告が行われました。

松田忠大副センター長による開会の挨拶に続き、第1部のポスターセッションでは、プロジェクト参加教員が来場者に直接プロジェクトの説明を行いました。和やかな雰囲気のもと、参加者はそれぞれの研究テーマについて深く知る良い機会となったことと存じます。

第2部では、下記3件のプロジェクトについて口頭報告が行われました。

- ・ 島嶼の伝統野菜の維持・保存と教育への活用～伝統野菜と郷土の食文化を復活させる食育プログラムを通して～ 中野八伯技術専門職員（教育学部）
- ・ 与論島からの「移民」についてのオーラルヒストリー研究：森崎和江『与論を出た民の歴史』の「その後」 藤村一郎准教授（共通教育センター）
- ・ 「種子島研究」の探索とアーカイブ化による教材および教育方法の開発 出口英樹准教授（高等教育研究開発センター）、福田祐真（早稲田大学大学院 修士課程1年）、上川路亮太（法文学部3年）

いずれの報告も、それぞれの課題に対する深い洞察と社会的意義を感じさせるものであり、参加者からは今後の取り組みに対する期待の声が寄せられました。

振り返りでは、プロジェクトに参加した教員から、学生のより積極的な参加やプロジェクトの講義化などへの期待が挙げられました。これらの点につきましては、本年度、積極的に取り組んでまいります。

閉会の挨拶では、藤内哲也法文学部長より令和7年度のプロジェクトへの更なる期待が語られました。

当日は悪天候にもかかわらず多くの皆様にご来場いただきました。なかでも、弊センターの客員研究員の方々に多数ご参加いただいたことは特筆すべき点であり、この交流から今後の地域マネジメントプロジェクトにおける一層の創発的発展が期待されます。

地域マネジメントプロジェクトは、現代の鹿兒島について考える上での最先端の研究が集積する場です。そして、複数のメンバーが領域横断的に取り組むことで浮かび上がる新たな学術的価値や、地域に直接的に貢献する迅速性もその大きな特長と言えます。これらの魅力的なプロジェクトを多くの方々に知っていただけるよう、今後も積極的に情報発信に努めてまいりたいと考えております。



令和7年度地域マネジメントプロジェクト一覧

- ・地域の文化の可能性を伝統工芸・アート・イラスト・食・本を焦点に探索するプロジェクト
太田純貴（法文学部）、農中至（法文学部）、秋吉康晴（法文学部）、
宇佐美達朗（法文学部）、菅野康太（法文学部）、清水香（教育学部）
- ・与論島を出た女たちと家族の歴史—鹿児島与論会、旧田代町盤山、大牟田・荒尾
藤村一郎（共通教育センター）、山田良介（九州国際大学）、
日高優介（近現代センター）、酒井祐輔（法文学部）、農中至（法文学部）
- ・鹿屋における生態と記憶の交差点としての地域資源：生態系と生活史を架橋する地域学的アプローチ
川西基博（教育学部）、伴野文亮（近現代センター）難波美芸（グローバルセンター）
- ・鹿児島県における高校「総合的な探究の時間」指導支援プロジェクト
小林元気（中等・高等教育接続センター）、早崎綾（中等・高等教育接続センター）、
倉元賢一（教師教育開発センター）、杉山大幹（教師教育開発センター）、
祁白麗（教育学部）、伊藤奈賀子（高等教育研究開発センター）、
出口英樹（高等教育研究開発センター）、日高優介（近現代センター）
- ・戦前期、在校生・同窓生の視座にたった日常史・社会史・文化史的アプローチによる鹿児島学校の文化の解明
佐藤宏之（教育学部）、金井静香（法文学部）、
竹村茂紀（近現代センター・客員研究員）
- ・垂水の戦争の記録と活用：地域社会との価値共創
石田智子（法文学部）、中嶋晋平（近現代センター）、吉田明弘（法文学部）、
高嶺光佑（垂水市教育委員会社会教育課）
- ・食育教育プログラムを通じた伝統野菜の里帰りと地域振興
志水勝好（農学部）、酒井祐輔（法文学部）、一谷勝之（農学部）、
中野八伯（教育学部・技術専門職員）、浅野陽樹（教育学部）、龍野巳代（教育学部）
- ・「ケアする近接性」の創出に向けた地域内価値循環システムの構築—薩摩川内市におけるケア・ポイント制度の実証的研究—
金子満（法文学部）、大川畑のり恵（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科）
- ・近代沖永良部における階層制と双系制：墓と屋号と婚姻関係による社会構造の解明
中谷純江（グローバルセンター）、永山修一（近現代センター・客員研究員）
兼城糸絵（法文学部）
- ・鹿児島発の国際平和教育モデルの構築：世代・立場・国を越えた連携を通じて
加藤慧（グローバルセンター）、中嶋晋平（近現代センター）、
中谷純江（グローバルセンター）

鹿児島大学の戦争の爪痕－「玉利喜造先生」銅像台座の銃弾痕

法文学部人文学科 准教授 小林 善仁

1. はじめに

令和7（2025）年は、アジア・太平洋戦争の終戦から80年の節目に当たる。80年前の昭和20（1945）年の鹿児島市街地は、度重なる空襲の被害により、約93%が焦土と化した（鹿児島市1982）。その被災範囲は、復員帰還者のために第一復員省資料課が作成し、現在は国立公文書館が所蔵する『全国主要都市戦災概況図』に記録されており、これを見ると市街地の被災状況と共に鹿児島大学の各学部の前身に当たる学校の多くが空襲の被害に遭ったことが分かる。

旧軍事施設や空襲の焼け残り建物などの戦争の爪痕、いわゆる「戦跡」は鹿児島県内・市内の各地に存在し、鹿児島大学郡元キャンパスにも僅かに残されている。本稿で取り上げる農学部・共同獣医学部共通棟前に建つ「玉利喜造先生」銅像（以下、玉利像）の台座の銃弾痕もその一つである。

2. 玉利像台座の銃弾痕

銅像の傍らに建ち像主の略歴や建立の経緯などを記す石碑のことを副碑と言う。これを読むと、玉利喜造が明治41（1908）年3月に設置され、翌年9月に開校した鹿児島高等農林学校の初代校長であることや、前任地が日本初の官立高等農林学校で食糧増産と林業資源開発、農業技術者の育成を目的に設立された盛岡高等農林学校であることなどが知られ、彼の功績を讃えて大正14（1925）年11月に卒業生有志により胸像が建立されたと分かる（図1）。なお、作者は鹿児島の西郷隆盛像や渋谷のハチ公像と同じ安藤照（鹿児島出身）である。

銅像を一目見て、誰もが気付くのが台座にある四つの傷（窪み）であり、じっくり見ると気づくことが、銅像の方にこれらの



図1. 「玉利喜造先生」銅像の副碑
※筆者撮影。

傷が存在しない点である。この台座と銅像の傷の差が生じる理由も副碑を読めば分かり、ここに戦争が関係している。副碑によれば、戦時下の日本で国策として広く行われた金属類の供出により初代の銅像が撤去・供出され、現在の銅像は戦後に再建された2代目で、台座の傷もこの間の空襲による弾痕であると記す。

ここで、銅像と戦争の関係を少し記しておく。開戦に先立つ昭和16（1941）年5月施行の国家総動員法に基づき、同年8月に金属類回収令が施行され、鹿児島市でも同年11月から生活に必需でない不要不急の金属類の特別回収が実施された。いわゆる金属供出である。

但し、この時に銅像は対象とならず、銅像が回収の対象となるのは同令が改正された昭和18（1943）年3月に「銅像等ノ非常回収実施要項」が閣議決定されてからである（平瀬2013）。金属資源に乏しい当時の日本では、銅像だけでなく、寺院の梵鐘や学生服の金ボタンも回収されて兵器の生産に使われた。

鹿児島県でも、同年6月に県内各地から供出された銅像が鹿児島市へ集められ、6月30日に市役所中庭で応召銅像23体の壮行会が開催された（「鹿児島日報」同年7月1日付夕刊）。第七高等学校造士館（旧文理学

部・旧一般教養部の前身)の島津珍彦や岩崎行親など教育関係者の銅像が供出されたのは、学生・生徒らを勤労働員する戦時下において、銅像であっても教師が報国の模範を示す意味があった。なお、玉利像は前述の応召銅像23体に含まれず、像の供出に関する新聞記事も管見の限り確認できないため詳細は不明であるが、この頃に供出されたと考えられる。

3. 玉利像と昭和20年の空襲

前述の通り、昭和20年の鹿児島市街地は度重なる空襲により、市街地のほぼ全域が甚大な被害を受けた。玉利像台座の傷もこの間に生じたのであるが、副碑に明確な時期の記述は見られない。他方、関係の文献には「昭和20年の米軍機による機銃掃射時の弾痕」と述べられている(丹羽2015)。

昭和35(1960)年刊行の『鹿児島大学十年史』は、鹿児島農林専門学校(昭和19年4月改称)への空襲として昭和20年4月8日と6月17日の2度の空襲を記録している。多くの人が後者の鹿児島大空襲により台座の銃弾痕が生じたと考えられるだろうが、講堂や図書館書庫(図2:後者は現鹿児島大学総合

研究博物館常設展示室)など僅かの建物を残して校舎が全焼した鹿児島大空襲は焼夷弾爆撃であるのに対し、台座の傷は円形の銃弾痕であるため、この時とは考え難い。何より、空襲被害を復原するには現在の状況が空襲当時と同じか否かも、検討する際の重要な要素となる。

この点を知る上でのヒントも副碑の文中にあり、農学部開学75周年記念事業として学内施設の整備が進むなか、銅像設置場所の周辺環境が大幅に変化したことにより、昭和59(1984)年11月に現在の場所へ移転した旨を記している。このことから、移転前の玉利像の位置を確認すると共に、それが戦前期の場所と同じであれば、移転前の位置が最初に玉利像が建立された原位置となる。

移転直前の玉利像の姿は、昭和55(1980)年発行の『鹿児島大学農学部七十年史』の写真に収められている(図3)。これを見ると、現在とは場所が異なり、南へ約40m離れた正門内ロータリーの椰子の植え込みの横に建っている。この場所は昭和11(1936)年頃の「鹿児島高等農林学校建物配置図」の「玉利博士銅像」の記載とも一致する

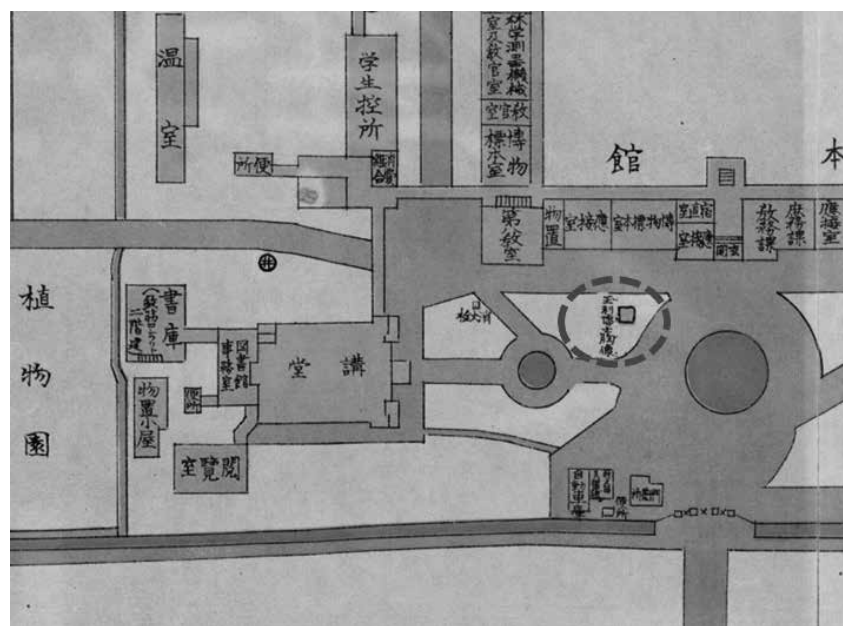


図2.「玉利喜造先生」銅像の原位置 ※『鹿児島高等農林学校一覽』昭和11年～昭和12年。



図3. 移転前の「玉利喜造先生」銅像
※『鹿児島大学農学部七十年史』。

(図2破線丸囲み部分)。

『鹿児島大学十年史』によると、昭和20年4月8日の空襲では玉利像の原位置直近でもある正門ソテツ植込付近など校内数カ所へ爆弾を受け、会計課職員1名、駐屯兵士2名が正門付近で爆死したと共に、学生1名が農場で機銃掃射の犠牲になっている。他方、『全国主要都市戦災概況図』を見ると、8月6日の空襲でも鹿児島農林専門学校を含む上荒田町などが攻撃を受けているが、学校の被害など具体的状況を記録する資料が存在せず不詳である。以上を踏まえ、現時点では玉利像の原位置などから考えて、台座の銃弾痕を4月8日の空襲によるものと結論付ける。

4. おわりに

甚大な空襲の被害から復旧した前身校は昭和24(1949)年5月末に統合し、新制大学として鹿児島大学が発足した。副碑によれば、同年に玉利像(図4)も再建されており、作者は照国神社北隣の三公銅像(島津斉彬・久光・忠義)と同じ朝倉文夫である。

戦争に関する資料と記憶は、戦後80年が経過した今日、適切な記録と保存が喫緊の課題となっている。一方で、戦争とその被害に関する資料の発見も続いている。節目の年だから関心を持つのではなく、継続して過去の戦争と向き合い、資料の収集と分

析を行い、歴史と地理の解明に取り組み続けることが大事である。

【文献】

- ・『全国主要都市戦災概況図』昭和20年12月作成。
- ・鹿児島高等農林学校(1937)『鹿児島高等農林学校一覧 自昭和十一年至昭和十二年』。
- ・鹿児島大学(1960)『鹿児島大学十年史』。
- ・鹿児島大学農学部(1980)『鹿児島大学農学部七十年史』。
- ・鹿児島市(1982)『鹿児島市戦災復興誌』。
- ・平瀬礼太(2013)『彫刻と戦争の近代』歴史文化ライブラリー365, 吉川弘文館。
- ・丹羽謙治編(2015)『平成27年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開 旧制鹿児島高等農林学校の底力』, 鹿児島大学附属図書館。



図4. 現在の「玉利喜造先生」銅像
※図1と同じ。

五代家の墓碑銘について

「鹿児島近現代」教育研究センター 客員研究員 友野 春久

はじめに

筆者は平成17年1月から数ヶ月間、市内墓地の「五代家墓碑銘」を調査しデータベース化している。「五代」と刻まれた竿石の文字に着目し、掃苔しやすい冬から春にかけて墓地を歩き廻った。その結果、坂元墓地に友厚父秀堯家と他に1基、興国寺墓地の同一墓域に個人墓9基と判読困難墓6基、南洲墓地1基、草牟田墓地の1基に出会うことができ、この地では新たな情報も得られた。本稿では「近現代」から遡る一次データも含まれるが、これらの墓碑銘を載せ、既刊資料にみえない五代諸氏もみえるので一考してみたい。

坂元墓地

五代友厚(1835～1885年)家の墓は城ヶ谷の誕生地(長田町31番)から坂を下り、道なりに歩いて500m程の不断光院にあった(図1)。昔は坂元村と呼ばれ、現在の住居表示は長田町14・15番で南風病院の地になる。不断光院は京都浄土宗総本山知恩院の末寺で、阿弥陀如来を本尊とする浄土宗の寺院で、永禄5年(1562年)の創建になり200石を領していた。薩英戦争(1863年)で英艦の砲撃を受け、近くの浄光明寺・般若院と共に焼失し、本堂は再建されないまま廃仏毀釈により明治2年11月廃寺となり墓地だけが残った(図2)。同10年西南戦争終結時には薩軍戦没者120名余が仮埋葬されていた時期もあった。

不断光院の友厚家墓設置時期は未詳であるが、長女武子の婿竜作(龍作)は山ヶ野金山鉱業館長在勤中(明治37年～同45年)に墓参の際先祖の墓碑銘を次のように書き留めている。「山上ニ、五代家数個ノ碑石アリ。古碑ニシテ、文字不明ノ物アリ」とし、判読できた4基をあげ、さらに「一段山ノ下部ニ在リシヲ、更ニ兩三年前、最下部ノ墓地ニ改葬セシモノ、左ノ三個ノ如シ」と友厚父母らを記している(『五代友厚伝記資料』第4巻)。

市の都市計画事業により墓地は昭和34年に廃止され、多くの墓は坂元墓地に改葬された。その際に五代家墓碑銘を筆写した資料がある(図3)。この中には文政13年(1830年)記録奉行を勤めた(「入来院文書」)五代孫次郎友古の新納将舟による碑文も含まれている(図4)。



図1 天保13年城下絵図



図2 明治40年地図

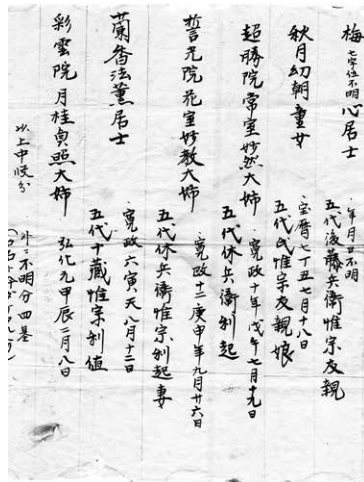


図3 五代家墓碑銘

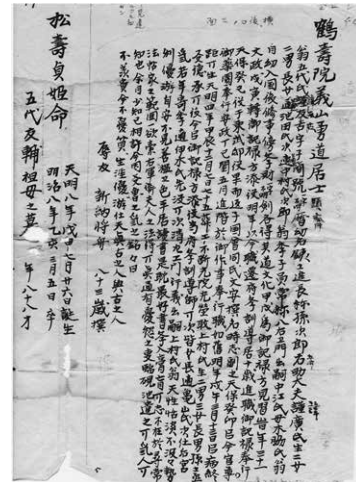


図4 友古碑文

友古の碑の正面には戒名、他の3面に家譜・来歴・人柄等が記されている。

鶴壽院義山勇道居士（正面）

翁五代氏諱友古字子簡號頤齊幼名鏡之進長稱孫次郎考助太夫諱廣氏生二女
二男長女適池田氏次適中村氏次郎翁季子員常稱八右衛門出嗣中江氏母木脇氏翁
自幼入国学修事傍孝財□劍各得其道文化甲戌爲御記録方見習廿年三十一
文政戊寅轉御記録方添役明年以今職遷府季訓導居十歲進職御記録奉行
天保癸巳役于東武邸役畢而返于國會同氏文安撰名勝志副之天保癸卯以今官轉
御藥園奉行安政丁巳閏五月進階於御作事奉行職如舊明年戊午三月十三日以病終
距其生天明四年甲辰十二月七日七十五葬于不斷光院先塋娶上村氏生二男三女長男源之丞
友德承其役今以御記録方添役爲府学訓導師其次皆女長適龜山氏次仕后宮
爲若年寄季適伊木氏先没其次清左衛門行義出嗣上村氏翁天性恬淡不汲々勢
利優游自安不見善慍之色平居讀書是耽最好書季入膏肓其志不在於尋常
法帖家之範圍一欲索右軍衛□人之法得其真通有憂愁之憂臨硯池遺之其爲人可
知也余目少知己相許今因友魯之爲之銘々曰
不羨貴今不憂貧生涯優游仕天真古之與古之人
辱友 新納将舟 八十三歲撰

友古碑文に続く筆写資料に友厚の墓はないが、個人墓の没年順に記すと次のようになる。

- ①五代氏惟宗友親女 秋月幼朝童女 宝暦七丁丑七月十八日
- ②五代八太郎友周妻 松林院涼榮大姉 明和二乙酉年五月十有三日
- ③五代八太郎友周 法性院純智白雲居士 明和七年庚寅閏六月廿九日 行年七十八才
- ④五代十藏惟宗利值 蘭香法薰居士 寛政六寅天八月十二日
- ⑤五代休兵衛利起母 超勝院常室妙然大姉 寛政十年戊午七月十九日
- ⑥五代休兵衛惟宗利起妻 誓光院花室妙教大姉 寛政十二年庚申九月廿六日
- ⑦五代休兵衛惟宗利起 春光院山梅林居士 文化四年丁卯正月廿七日
- ⑧五代直左衛門秀堯女 智禪宝惠童女 文政五年壬午十二月十二日
- ⑨五代直左衛門秀堯妻 翫月院事□大姉 文政□□□申□□月十日
- ⑩（不詳） 彩雲院月桂貞照大姉 弘化元辰二月八日

⑪五代友輔祖母之墓 松壽貞姫命 天明八年戊申七月廿六日誕生 明治八年乙亥三月五日卒 年八十八才

⑫五代徳男合葬墓 直左衛門秀堯妻・淳夫・松子 昭和十四年七月廿九日建之

⑬五代後藤兵衛惟宗友親 梅□□□□心居士 (年月日不詳)

外二不明分4基

前述のとおり、昭和34年に個人墓を「寄せ墓」にして坂元墓地1等甲2号地へ改葬し、さらに市政100周年の平成元年に五代家会により新たな墓を建てた。墓域内に「五代友厚記念碑」もあり友厚の履歴・功績が刻されている。不断光院墓地当時(前者)と現在の墓碑銘(後者)にいくらかの違いがみえるので次に示す。

①五代氏惟宗友親女 秋月幼朝童女→五代後藤兵衛友親女 亜紀月幼朝童女

③五代八太郎友周 行年七十八才→五代八太郎友周 行年は刻まれてない。

④蘭香法薫居士 寛政六寅天八月十二日 → 欄香釈迦薫居士 寛政六年八月二十二日

⑤五代直左衛門秀堯女 智禪宝恵童女→坂元墓地には戒名は刻まれてない。

⑨五代直左衛門秀堯妻 翫月院事□大姉 文政□□□申□□月十日(文政七年甲申か)。

→坂元墓地墓碑銘にみえない。この女性は五代秀堯の最初の妻で、隈元庄左衛門の娘。後妻は本田七左衛門の嫡女やす(『五代秀堯履歴』)で、坂元墓地には浄聖院締徳孝姉、慶応四年六月二十七日没と刻まれている。

⑩(不詳)→五代直左衛門秀堯女 彩雲院月桂貞照大姉 弘化一年二月八日

⑪五代友輔祖母之墓 松壽貞姫命→坂元墓地には刻まれてない。

⑫五代徳男→五代直左衛門秀堯男徳夫、坂元墓地では戒名・没年共に不詳となっている。

⑬五代後藤兵衛惟宗友親→坂元墓地では戒名、没年共に不詳となっている。

その他 前掲資料に、天保14年(1843年)『三國名勝圖繪』を編纂した直左衛門秀堯はみえない。坂元墓地には「義聖院締山智順居士 嘉永六年五月六日没」と刻まれている。

本家友慶の次子舎人友安は父の高200石を分け別立。寛永10年(1633年)62才で没し、墓は不断光院にあったので上記不明分4基の中にあるか。

坂元墓地の他の1基(特等乙3号、使用者:五代友文 墓地使用者原簿)。

⑭五代三二 祖父 大正十五年十月三十一日 五十三歳

⑮五代 忠 友文長男 昭和二十年五月二十一日 十八歳 戦死

⑯五代ヌイ 三二妻 昭和四十一年九月二十二日 八十八歳

⑰五代友文 三二長男 昭和四十九年一月七日 七十五歳

⑱五代カツ子 友文妻 昭和五十八年十二月三十日 八十歳

昭和四十九年六月吉日建之

(この墓の被葬者の出自は不詳)

興国寺墓地

7合目附近に溶結凝灰岩製の個人墓が計15基写真右側(図5)にある。いずれも風化が激しく台座は土に埋もれ判読困難な文字もあり無縁墳墓状態であった。②以下没年順に記す。



図5 興国寺墓地

- ①⑨五代正助（正面）□□□信士（左側面）、笠付方形で高さ約1.5mあり最も大きい墓。
 - ②⑩五代助兵衛惟宗友相（正面）、他の面は判読困難。
 - ③⑪五代正助室 享保九甲辰五月十一日（1724年）
 - ④⑫内藤喜右衛門藤原□章 晴閑紅□居士 宝暦十二壬午（1762年）五代家との関係は不詳であるが、⑤⑬四郎助と⑥⑭助五郎の間に建っている。
 - ⑦⑮五代三左衛門惟宗友張 □□癸酉 □□四日（文化10年、1813年か）
 - ⑧⑯五代三左衛門妻 文政三庚□四月十六日（庚辰1820年）
 - ⑨⑰五代助五郎友卿妻 文政十三□□（庚寅1830年）
 - ⑩⑱五代四郎助 正助四男 □勇山宗智居士 慶應三年丁卯三月廿七日（1867年）、高さ0.5m程で台座は埋もれている。
 - ⑪⑲五代助五郎 良岳祐心居士 明治十九年旧九月十一日 年六十三才
- これらの墓は名前の通字に「友」を使用しているので友厚家と同族であろう。他に判読困難分6基ある。

草牟田墓地（隆盛院）

墓地入口の花屋さんから、五代家の墓は同一区画に5基ほどあったが、平成12年頃に東京へ改葬されたという情報を得た。隆盛院には五代家本家の友慶（寛永3年没、1626年）と、友泰（寛永19年没、1642年）の墓（「稱名墓志」）があったので本家墓と思われる。

- ⑫⑲五代政次郎 旧墓地区画に個人墓がある。生没年・享年・家紋は刻まれていない。
(政次郎の出自は不詳)

まとめ

鹿児島城下の五代家数を年代別にみると、寛永13年（1636年）2家、宝暦3年（1753年）7家、文政4年（1821年）5家、天保13年（1842年）3家、安政6年（1859年）3家、と変遷する。南洲墓地には明治10年4月14日に吉田で戦没した五代一二、西南戦争国事犯に五代友廣（40歳）、免罪人に五代正之進・新左衛門・與七らがいる。五代家は冷水・清水・長田・春日町などの旧武家地にみえる（「旧土地台帳」）。失われつつある古碑のデータ保存の重要性を感じている。

鹿児島伝統の音文化 薩摩琵琶の継承 最前線

「鹿児島の近現代」教育研究センター客員教授（東京音楽大学教授）原田 敬子

本稿では、2012年以來の動態調査「薩摩琵琶の継承」についてご紹介する。少し先の予定だが、年度末の「鹿児島の近現代」連続公開イベント〔#昭和100〕で、調査研究報告に加えて、継承者をお招きし弾奏もお聴き頂く予定。是非ご参加頂けたらと思う。

さて、筆者が江戸流と全く異なる、鹿児島伝統の薩摩琵琶を知ったのは、2012年1月。きっかけは鹿児島に赴任した友人の強い「推し」だった。友人は旧自治省出身で自治のプロだが、芸術文化に深く造形があり全国に転勤の経験があった。その上での言「鹿児島県はちょっと特別。歴史文化の奥が深い。ぜひ来て」。それ以来約14年半、筆者は薩摩琵琶継承の動態を「対話の手法」で記録している。理由の1つは当時「公けの場で弾奏できるのは3人のみ、最も若い継承者は30代後半、継承の大危機」と継承者に聞いたこと。数年後、筆者の専門分野である作曲で、新作琵琶曲を継承者と共に鹿児島市内で公開発表、その年（'15）に鹿児島大学の学生が二名弟子入りした。その数年後、更に同大学生が二名、薩摩琵琶の製作を志して弟子入りし、地元新聞社が報道した。今年、前者の二名は弟子入り10年目。今では小学生～初心者のお大人を教えるまでになった。ここ鹿児島大学から継承の大危機に4名も弟子入りした快挙を記しておきたい。また近年、中堅世代の不断の努力により継承危機が改善されつつある（幼稚園児にまで希望者が広がり始めた）。目下の課題としては、昨年、県指定無形文化財保持団体「薩摩琵琶同好会」が100周年を迎えたが、古い貴重音源や文献が個人保管で一元化されておらず、内外からのアクセスが困難。これが県内外での認知の低さ

や、研究者が久しく現れない（約40年間ほぼ空白）遠因ではないかと推察し、活気づいてきた今こそ、との思いで、継承者の方々に呼び掛け、県指定無形文化財化（'62）に10年先駆けて刊行されていた年報をかき集めた。筆者はこれを一次資料として報道記録年表を作成しながら、当センター設置のデジタル南日本新聞データベースを活用して地元放送局、NHK等に映像／音源の所在確認を急いでいる。その理由は、最も古くて60年前後経つオープンリールやテープの寿命であり、順次廃棄される可能性が高いからだ。また鹿児島市内で毎週稽古を行う「薩摩琵琶共研舎道場」の方々は、デジタル化と目録作成のために全ての音源を聴く、という作業に取り組んでいる。こうした協力を得ながら、筆者は当センターで明治時代の未出版／稀少文献のPDF化も進めており、そこに筆者が記録してきた映像／音源を加え、初の資料一元化を目指している。3～4年にかかる見込みだが、もちろん将来の継承者や研究者の出現と活用を期待してのことである。先ずは目の前で現在の継承者に出会って頂きたく、冒頭でご紹介した当センター主催〔#昭和100〕（2026年3月半ば、鹿児島市内で開催予定）にご参加頂けたらと願っている。



若い世代への継承 於 共研幼稚園（鹿児島市）

再録・中島馨「雪のサンタマリアの奇蹟」

「鹿児島近現代」教育研究センター 特任助教 鈴木 優作

ここに再録するのは推理小説評論家・中島河太郎（本名・中嶋馨）による短編小説である。中島は1917年、鹿児島県鹿児島市平之町に生まれた。県立第一鹿児島中学校（現・県立鶴丸高等学校）を経て、1936年に第七高等学校造士館文科に入学し1939年に総代で卒業する。七高では文芸部に所属し同人誌『啓明』91～98号に、俳句・短歌・随筆・小説等を寄稿している。「雪のサンタマリアの奇蹟」は91号（1936年6月刊行、本学附属図書館所蔵）に掲載された短編小説で、中嶋淑人編『中島河太郎著作集』（上下、2020～2021年）には未収録の著作である。17世紀の高来地方（長崎）におけるキリシタン迫害を題材とした怪奇小説で、1940年に書かれた短篇小説「牧師館綺譚」（『みづいろ』2号）には主人公「私」が「おおあなたがいつか学校の雑誌に「サンタマリアの奇蹟」を書いた方か」とあり、後の創作とも連続性がある。なお、漢字は通行の字体に改め、明らかな誤植については直した。くの字点は横書きのため用いていない。



雪のサンタマリアの奇蹟

中島 馨

その頃私は療養がてら黒衣村に孤独の生活を送つてゐた。私のかねてからの厭人癖が嵩じた揚句、塵埃の煙幕を張り巡らした都会が鬱陶しくなつたので、平素から憧憬を抱いてゐた此の村に逃避したのである。何故なら猯が夢を喰ふ様に私はファンタジイを咀嚼して生きてゐる者で、そこには多分私の空想を屹度満して呉れるに相違ない風物が存在するからである。

私の居る所は山番小屋みたいに、ぽつんと松林の中に一軒取り残された所で、南向きの座敷に寝そべりながら防壁の様に積み重ねてあるオカルティズムやデモノロジイや、クリミノロジイの書物から立上る、妖気と血臭にむせびながら読書に耽溺してゐた。疲労すると、すっかり雨戸を閉め切つた闇黒の中で、時とすると蠟燭を灯して、絢爛たる空想の絵巻を展げ始めるのである。

併し流石の私も蒼穹に弧を描く初夏の太陽に、つい誘はれて程遠くない小丘に登る事も度々で、その時、例へばギヤアードの「巫妖に関する対話」だとか、ロオルの「食鬼攷」又はシンストラリの「悪魔論」だとか、或はストツクの「吸血鬼論」等が私のお伴を言ひつかるのが常だった。

然もその小丘の正面に教会堂のクルスが、蒼天を背景にして銀色に輝いてゐるのが、私の眼下から縮緬皺みたいな波を起してゐる湖水に投じてゐる様は、恰も湖心に在る龍珠が放つ光線に。更に神々しい光輪を環したものの、様で、それが夕方ともなれば、ファンタジストの私をして、何時迄もエキゾティシズムの渦巻に捲き込んで釘づけるのである。それに落陽を受けて四辺の空気に迄、燦然たる崇厳さを滲透させる十字架に和するが如く、鐘

樓から緩かな音波が流れ出ると、野良に働いてゐた農民の胸に、敬虔の念を伝はらせ、一様に礼拝堂に向けて、波紋の拡りを逆に収縮する様に、老若男女が今日の一日の感謝を捧ぐ可く、急ぐのを見ては、幾度か、孤独な人嫌ひな私は、涙の頬に伝ふるを止め得なかつた。

それは南の海に近い此の黒衣村に、夏が判然と姿を現はして、日毎の蒼山白雲は、淡い旅愁を感じさせもしたし、又いつそのこと遠い紅毛碧眼の国々を訪ねたいと思つた。書を閉ぢると、頭に靄のかゝつてゐるのを消散させる為、頭を振りながら、不図卓上カレンダーに目を落すと、今日は八月五日であつた。

——おや、なんだつけ？

と、頻りに頭をひねるものゝ、何かしら此の日附が、私に与へる感情を解く可き鍵を探し当てないので、じれつたくなりながらも、とつぷり暮れてから散歩に出掛けようと思つてゐた。

きんぱうげや釣鐘草や簪草など、が密林の中を蟲郡とうねる小径をさへも抹殺する許りに蔓つて、昼間でさへ見掛けるとかげやむかで等の爬虫類が、死魚の様な眼で、草の葉の隙から、大地の肌から無気味な放射を向けてゐるのだと思ふと病身の私は尚更、歩を進ませかねるのであつた。頓て行き馴れた丘の、しつとり露を置き始めた草に腰を卸し、朗々たる月の上るのに対してゐると、月光を背景に、黒々とした姿を切抜細工みたいに、中天に張り付けてゐる教会堂は、それが尚更十字架を背負つてゐるだけ、じつと凝視してゐると、黒衣に身を包んだ聖母が侘しげな面持で、俯向いてゐる様に思はれるのである。さうして私は

挙頭望山月 低頭思故郷

と云ふ李白の詩に感傷を弄びながら、何くれとなく走らせた視線に、向ふの岡が偶然的な連想を引き起したのである。それは羅馬七丘の一つである、エスクイリーノの丘で、此れに依つて私の心に先刻から漂つてゐた暗雲を追い払ふ事ができた。何故なら云ふ迄もなく、此のエスクイリーノの丘に雪のサンタマリア寺と呼ばれる一寺があり此の寺の縁起こそ、今宵の八月五日を舞台とした物語だからである。その伝説を咀嚼しながら、湖水に破けてちらつく月の破片を見てゐると、急に掬つてみたくなつたので、せめて湖辺迄とそろそろ降り始めた。遠くからもつい頭の上からも、ホウホウと気味悪く鳴く梟や、得体の知れぬ夜鳥の凄寂たる啼き叫びは、湖畔を直ぐ眼下に見ながら、引き返さうと思はせる程であつたが、その引き返さうとする足を釘付けにしたのは、思ひ掛けない私以外の夜の散歩者であつた。視線を灌木が妨げたけれども、確に若者らしい姿である。驚愕が好奇心に変ずると、何を、かういふ場所ですてゐるんだらうと云ふ難問にぶつかった。冷たく緩く砂を噛む波の、そつと忍び寄る処に立ちつくした姿は、気味悪いものが蠢動してゐるに違いない此の暗黒の夜を、更に月の醸し出す渡し用す妖気が一面に蔽ふて、陽に起き陽に入る人々には思ひも寄らぬ一幅の絵画に全く調和して、私は恐怖も忘れ只々ぼけた様に立すくんでゐるのみであつた。それでも不図、ギリシヤ神話にある、一日湖辺を通り、水面に映じた自分自身の映像の美しさに恋着し、遂に焦れ死をして白水仙の花と化したと云ふナルチスムスの伝説を思ひ浮べた。そこで私は躊躇なく叢の中から姿を現はして近附くと、その足音に振り返つた姿に再び驚愕の眼を瞠らねばならなかつた。月光の射し具合で、先刻

は少しも判らなかつたけれど、今、こうして対して見ると、どうしたと云ふのだらう、よく南蛮関係の図絵に見掛ける吉利支丹の伴天連が着けさうな服に身をかためてゐるのである。その両立はあんぢよのそれで、無邪気な微笑は、白痴かと思はれ、それでかういふ服装をしてゐるのではないかとさへ想像してみた。

——何をしてゐるのです？

——失はれた物を求めてゐるのです

と、遠く去つたものを呼び還さうとする様な眼差を、湖上へそつと走らせながら、云つた声は辺りの夜気に透き通る様に浸みこんだ。

——探し物？ 何です、それは。手伝つてもいいです。どうせ退屈な時を過してるんですから、

と云ひながら、かういふ夜には、それに相応しい金色の浪曼があつていゝ筈だといふアンリ・ドウデエの言葉がちらと閃いた。オカルティズムに凝つてゐる私が占星術に興味を抱かぬ筈はない。そこで私は予言者めいた口をきゝたくなつた。

——貴方の星は金星ですよ、

——さうかも知れません。併し木星に生れた者と、金星に生れた者と何方が幸福だつたでせうか、

さう云ひながら、異様に靨んだ眼を、いぶかしんでゐると、

——それでは、御退屈なら、かういふ御話を致しませう。

と、先に立つて湖畔の石に腰掛けた。月下に展開する満面には蛇が鱗を動かしてゐる様な、波の絶えざる夜の逍遙を伴奏としながら、聞くもおぞましい、血に彩られた一篇の詩を聞いたのである。

私は思ひ浮べてさへ憎悪と悲惨とに身を委ねなければならぬ話を、まして口に出したくは無いです。併し、此の話の終りで、若しや貴方を御歎ばせする事が出来るかも知れないと思ふからです、切利支丹迫害に就いて今更述べようと思ひませんが、一六一四年に於ける宣教師の追放は伴天連と以留満と合せて九十五人、日本人の信者迄加へますと数百人に上りましたが、その後、続々とマニラや天川からの宣教師の潜入がありまして、彼等は悲惨な伝道生活を続けながら主の道を説いてゐたのです。

一六二六年に京介と云ふ者が熱心な信者でありましたが、折からその高来地方の領主松倉氏の迫害が甚だ嚴重になりましたので、それ迄絶えず搜索の網から洩れて、布教に従事して居りましたマタイコウロスに、船中へ逃避するように他の信者と勸説したのです。領主は部下を派遣して到る所の倉庫、家屋、厩舎を間はず床を毀ち、蓆を剥いで一隅も見逃さぬように懸命な捜査を続けて居りますので、到頭地下に坑を掘ることになりました。その大きさは四尺、長さは一丈二尺で日光は勿論、いかなる光も透入しない暗黒坑でした。唯、彼と教方と従者との三人がこの坑中で昼夜を送り、知る人は僅かに家主の京介だけでした。僅に食事と礼拝と教用の書翰を書く時だけ、灯をともし、終ると消すのです。坑の隣に老人の工作する小屋があり、そこから孔を通じて食物を差入れ、孔は藁で隠してありました。三日毎に坑の戸を開け空気を交換し、かくて三十五日籠居しますと、京介は新しく坑を作り、そこでは彌撒に要する品を納め、夜に至れば小屋で祭り、昼は小隊からの光で書を読んで、牢獄の生活を送つてゐたのです。破綻の日は間もなく近付いて京介の身が

危くなり、今日も昨日も珠数つなぎの列を見、日毎の処刑の有様は、哀憐の心なくして聞けるようになりました。その拷問の方法も絶えず新手が考案され、温泉岳の地獄に炙籠に入れて炙るとか、毎日少しづつ竹鋸で引くとか、更に木馬責、水責や硫黄等を筒の中に入れてその一端を信者の鼻孔に嵌め、他の端に火をつけ、口を塞いで呼吸させる方法等があつたのです。又鉄の筒を身体に突き刺し、之を肉と共に抜きとつたり、婦人の信者には、面前でその子供を烙つたりしたのは口にす可からざる程の事です。さて先の京介は寛永四年頃案出された竹中采女の穴づるしの刑に遭つたのです。それは地に数尺の穴を掘り、穴の口に木材を横たへ囚徒の両足を之に縛り、幾日も食物も与へず、不生不死の間に責苦するのです。又囚人の全身を布で巻いて血液の循環を阻止し、時には多量の充血を減ずる為に顚顚のあたりに刺絡を施してこゝから出血させたと云ひます。此は色々な責苦の中、最も堪へ難い一つで、逆さに穴に吊り下げられますと、体内の五臓六腑が尽く胸中に飜り循環を阻止された血液は、段々下降して、耳や口や鼻から流れ出し筋はつれ、骨は痛み、何とも言ひ様のない苦しさを感じ心も苦はん許りであると申します。かうして京介は死んだのでありますが、その子をば一人前の宣教師にしたてようとして、此の黒衣村に赴いてゐましたのが十七歳でした。父の死を風のたよりに聞きまして、到頭その後を追ふて此の湖に投じた事は今は全ての人に忘れられてしまつた事です。いや、その方が結構なのですが、唯、残念な事には、彼が所持して居た幾多の書物の所在迄が忘れられたのです。

私は到頭、耐へかねて口をきつた。

——何といふ書物です。

——貴方の御承知のものでは、「こんてむつすむん地」や「ぎやどべかどる」——いやいや一々挙げかねます。

——そして、それは何処に、

私が、せきこんで聞くのを、静かに

——あの教会堂に……教会堂には地下坑があるのです。その入口は……

と、こまごまと私に教へて呉れた。私はローマのカタコームを思ひ浮べ、熱烈な信仰を暗黒に燃やしてゐる人を描いた。

——併し、貴方は、こんなに詳しく知りながら、何故取り出さないのです？

暫く沈黙が続いたので、私は思ひ切つて顔を挙げた。

其処には誰も居ないで、私一人がぼつんと岩上に取り残されてゐるのを知つた。

私はその夜、殆んど眠れなかつた。漸く東がしらむや真先に教会堂を訪れたのである。何故なら私は昨夜の少年の言に少しも疑念を挿まなかつたからである。

私が教へられた地下道に立つた時の感情は云ふ可くもない。まして私が石櫃の中から、「ぎやどべかどる」や「こんてむつすむん地」や「モルテ物語」「教化物語」に手を触れた時の感は、私をして卒倒せしめはせぬかと思はれる程、頭がぐらぐらと熱した。薄暗い坑内で、粗い石壁を見ながら、信徒の清話や、アーメン、ハレルヤといふ祈禱を聞いたと思つたのは、暫く経つてからであつたのである。 ——十一、五、十——

寄贈資料

令和6年度佐賀大学・武雄市交流事業特別展 佐賀を動かす～若き日の鍋島茂義と佐賀藩政～、佐賀大学地域学歴史文化研究センター（2025年2月17日、佐賀大学地域学歴史文化研究センター様より）

喜界島同人誌『榕樹』38・39・40号、『榕樹』編集部（2025年3月3日、得本拓様より）

近世鹿児島城下町の歴史考古学的基礎研究、太田秀春・小林善仁・丹羽謙治・森脇広・渡辺芳郎（2025年3月3日、渡辺芳郎様より）

第七高等学校造士館開校第十周年記念帖（2025年5月13日、與田和泉様より）

喜界島同人誌『榕樹』41号、『榕樹』編集部（2025年6月20日、得本拓様より）

今後の予定

今年度を通じて「鹿児島の近現代」連続トークイベント「#昭和100」を開催中です。また、11月8日には清泉女子大学人文科学研究所との合同シンポジウムを開催します。

近現代センター通信 第6号

2025年9月30日

発行 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター
〒890-0065

鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21-30

電話 099-285-7532

メール kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp

<https://kadai-kingendai.jp/>

印刷・製本 斯文堂株式会社

「鹿児島県の近現代」連続トークイベント

#昭和100

2025年は「昭和100年」にあたる年です。それに伴い、「#昭和100」と題してトークイベントを開催します。

このイベントでは、文学、歴史学、政治学、地理学などの視点から様々なテーマを取り扱います。

皆さんのお声も是非お聞かせください。

第1回

2025年
8月10日(日)
13:30～
鹿児島市中央公民館

「鹿児島県における
戦争記憶の継承活動」

山下春美 戦争を語り継ぐ集い・かごしま
神信裕 出水市平和学習ガイドの会
江山 鹿児島大学 特任専門員

第2回

2025年
9月15日(月祝)
14:00～
天文館図書館

「もう一つの
与論島の歴史」

藤村二郎 鹿児島大学 准教授
日高優介 鹿児島大学 特任助教

第3回

2025年
10月25日(土)
14:00～
かごしま近代文学館

「戦後八十年
梅崎春生
戦争とミステリ」

鈴木優作 鹿児島大学 特任助教

第4回

2025年
11月9日(日)
13:30～
サンエールかごしま

「陸軍特別大演習と
鹿児島県
鹿児島県」

竹村茂紀 日向学院高等学校 教諭
「鹿児島県の近現代」教育研究センター 客員研究員

第5回

2025年
12月13日(土)
【会場未定】

「石碑からみつめる
鹿児島県の近現代・
昭和を中心に」

東川隆太郎・東川美和
NPO 法人かごしま探検の会
「鹿児島県の近現代」教育研究センター 客員研究員

第6回

2026年
1月開催予定

「鹿児島の工業と工場
——谷山——」

小林善仁 鹿児島大学 准教授

第7回

2026年
3月開催予定

「薩摩琵琶継承に関する
研究経過の発表」

原田敬子 東京音楽大学 教授
「鹿児島県の近現代」教育研究センター 客員教授

お問い合わせ先

「鹿児島県の近現代」教育研究センター

TEL: 099-285-7532 E-mail: kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp

詳細はこちら



国立大学法人
鹿児島大学
KAGOSHIMA UNIVERSITY

「鹿児島の近現代」連続トークイベント「#昭和100」第3回

戦後八十年 梅崎春生 戦争とミステリ

— 梅崎春生のミステリ作品を
戦争という視点から読み直す —

2025年10月25日(土)

14:00～15:30

場所 かがしま近代文学館
メルヘンホール

予約不要 入場無料(定員70名)

講師 鹿児島大学特任助教 鈴木優作

※ご来場の際は公共交通機関でお越しください。

UMEZAKI
HARUO

1965年2月、自宅で撮影(撮影者不詳)
『われらの文学 3』1967年7月15日・講談社

主催／鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

お問い合わせ

鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター
TEL: 099-285-7532 E-mail: kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp

清泉女子大学人文科学研究所
鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター
共同シンポジウム



東京と鹿児島 二つの島津邸をめぐる近現代

令和7年11月8日(土)

13:30~17:30

入場無料

オンライン
配信あり

10:00~12:00	鹿児島会場 小林准教授のガイドによる鹿児島城下町まち歩きツアー(先着15人)
12:30~	東京会場受付
12:50~13:20	東京会場 清泉女子大学本館見学ツアー ※清泉女子大学学生によるガイド(先着40人)
13:00~	鹿児島会場受付
13:30~	開会・講演「近世・近代鹿児島の島津邸」 鹿児島会場より登壇 小林 善仁 氏(鹿児島大学法文学部准教授) 「袖ヶ崎屋敷の変遷 —仙台伊達家から鹿児島島津家へ—」 東京会場より登壇 狐塚 裕子 氏(清泉女子大学名誉教授) 「近代建築史の中の旧島津家本邸」 東京会場より登壇 石田 潤一郎 氏(武庫川女子大学教授、京都工芸繊維大学名誉教授) 「大名華族島津家の家政と二つの邸宅 —袖ヶ崎島津邸と磯島津邸を中心に—」 東京会場より登壇 寺尾 美保 氏(立教大学特任准教授)
16:50~	討論「東京と鹿児島が交流しながら、島津家および島津邸の歴史をいかに伝え、未来に活用していくか」
17:30	閉会

会場 要予約

東京会場

定員
200名

清泉女子大学 140教室

〒141-8642 東京都品川区東五反田3-16-21

鹿児島会場

定員
25名

尚古集成館 講堂

〒892-0871 鹿児島県鹿児島市吉野町9698-1

申込方法

- 東京会場(清泉女子大学)への参加もしくはオンライン(Zoomウェビナー)での参加をご希望の方は、右の二次元コードから専用フォームにアクセスし、必要事項を記入のうえお申し込みください。
- 鹿児島会場(尚古集成館)への参加をご希望の方は、下記のメールか電話でお申し込みください。
鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター
E-mail: kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp TEL: 099-285-7532(担当/佐藤、江)
- 鹿児島会場での街歩きツアーの詳細については、「鹿児島の近現代」教育研究センターHPをご覧ください。

【応募締切】2025年11月7日(金) 17:00まで

※東京会場・鹿児島会場ともに、定員に達し次第応募を締め切らせていただきます。

東京会場
オンライン参加



鹿児島会場



※清泉女子大学構内に駐車場はありません。
尚古集成館の駐車場は有料です。

後援/株式会社 島津興業 島津宗家記念財団 尚古集成館